2022 年度　卒業研究梗概

制　１０

デジタル社会におけるパーソナルスペース
-用途から解放された公共建築-

21919014　木下 はるな
指導教員　宮 晶子　教授

デジタルデバイス　パーソナルスペース　意識の範囲
用途性　没入感　公共

１背景と目的

近年インターネットやデジタルデバイスの普及はめざましく、リモートワークやオンライン授業といったデジタル化はコロナ禍により一層加速したといえる。デジタルデバイスにより、かつて就寝のための場所であったベッドルームは職場にもなり、都心の会議室へ行かずともミーティングが可能になった。デジタルデバイスを用いてどこからでも勉強、仕事、作業ができるようになり、それまで空間の持っていた一義的な用途はもはや存在していないといえる。このように、空間が用途のみでは語れなくなった今日、人々の自分の居場所に対する解像度は上がっているのではないだろうか。

デジタル社会における公共空間の役割は、用途から規定するのではなく、人々の心理的な身体感覚から規定することが求められているのではないかと考える。用途から解放され、人々が実空間における感覚によって居場所を選択することのできる新しい公共建築のかたちを提案する。

２パーソナルスペース

2-1 従来のパーソナルスペース

パーソナルスペースとは、他人が自分に近づいても不快に感じない限界の心理的範囲のことである。アメリカの文化人類学者のエドワード・T・ホールは、「かくれた次元」において、対人距離を４つのゾーンに大別し、それらをさらに近接相と遠方相の２つに分類した。その一つが、固体距離、パーソナルディスタンスである。エドワード・T・ホールは『二人の人を分ける距離を知る一つの手立ては、一般に声の大きさである』と述べているが、デジタルデバイスの普及した現代において、このパーソナルスペースの大きさは変化しているのではないだろうか。

2-2 デジタル社会におけるパーソナルスペース

対人距離は、音による要素が大きく影響することから、音を遮断することのできるイヤホンや、逆に声を発する必要のあるビデオ会議、電話会議などの利用によって、人間のパーソナルスペースは変化している。例えば、公共空間において、イヤホンを装着すると周囲の音は遮断されるため、他人に近づかれると不快に感じるパーソナルスペースは狭まり、その境界はより身体へと近づくと言える（図１）。一方で、電話やズーム会議の場合、会話をしている画面の向こうの人との距離感と、実空間に居合わせた他人との距離感の違いにより、人との距離感覚が錯乱し、自分の声の大きさやトーンを実空間の他人のみに合わせることができないため、対面して人と会話している時と比較し、パーソナルスペースは広がる（図 2)。

図１ イヤホンの着脱によるパーソナルスペースの変化

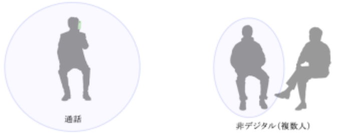

図２ デジタルデバイスを介した会話によるパーソナルスペースの変化

３意識の範囲

3-1 意識の範囲について

人は他人に近付かれると不快に感じるパーソナルスペースを持ちながらも、外部環境を知覚する意識はパーソナルスペースを超えて広がっている。身体の周りに広がり、自分を取り囲む景色や音、人の気配などの外部刺激を受け取る領域を「意識の範囲」と呼ぶこととする。パーソナルスペースに人が入ると不快に感じるが、人が歩いている駅を上から眺めることや、遠くの景色を眺めることは不快ではない。むしろ、長い間パーソナルスペースの範囲内のＰＣ等に集中していると、遠くの景色や街を眺めたくなる。このことより、パーソナルスペースが音による影響を受けていたことに対し、意識の範囲は視覚による影響が大きいと言える。

3-2 デジタルデバイスと意識の範囲

これらの意識の範囲も、デジタルデバイスの使用によって変化する。例えば、ＰＣ 作業に没頭している時、人の意識はＰＣ周辺に集中している。しかし、ふと集中が切れた

時、その意識は一気に周囲まで広がり、外部の刺激を知覚する。人はその時に遠くの景色を眺めたり、周囲を見回すことで実空間における充足感を補っているように思う。これは、デジタルデバイスの没入感が大きいほど変化が大きい。

3-3 公共建築におけるパーソナルスペースと意識の範囲

今日のオフィス、コワーキングスペース、自習室、駅中のステーションブースなどを見ると、用途に応じた効率的な空間構成となっている。これらの作業空間は、パーソナルスペースをもとに空間が構成されており、それよりも外に広がる「意識の範囲」については蔑ろにされている。その結果、人々は閉塞感により充足感が得られなくなったり、ストレスが溜まったりする。自分の居場所に対して解像度が上がった現代人にとって、デジタルデバイスによって変化した新たなパーソナルスペースと、意識の範囲にまで考慮した作業空間が必要だと考える。

4 提案

4-1 敷地選定

リモートワークの普及により、それまでのベッドタウンはもはや寝るための場所だけではなくなっている。居住地での暮らしの中に、用途からではなく自分の感覚から居場所を選び取り、気軽に仕事や勉強をしに行くことのできる公共空間の需要が高いと思われる住宅地として松戸駅周辺を選定した。

現在の松戸駅は、JR 東日本在来線および新京成電鉄が乗り入れると共に、市内のバス路線の主要なターミナルでもある。しかし、この松戸駅を中心とする市街地は、都市機能の更新時期を迎え、商業・業務面においても活力が薄れつつある。このような松戸駅前に多世代にわたる居場所となる公共空間をつくることで、多様化、曖昧化する現代の人々の用途の受け皿となるだけではなく、駅周辺の賑わいを生み、その周辺の飲食店や店舗の活性化にもつながるのではないだろうか。

既存の松戸駅西口のペデストリアンデッキを活かしながら、曖昧で多様な目的を持つ人々が自分の身体感覚をもとに居場所を選び、滞在できる公共建築を提案する。

4-2 パーソナルスペースによる手法

デジタルデバイスによるパーソナルスペースを設計するにあたって、「音」が重要な手がかりとなる。
以下４つの手法において、音環境のゾーニングを行う。
１背後に囲まれ間のある空間(図 3)
２壁の厚みによる遮音(図 4)
３床高さの違いによる空間分け(図 5)
４天井高さによる空間分け(図 6)
５天井の角度によるコントロール(図 7)

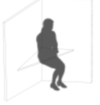
図３

図４

図５

図 6

図 7

4-3 意識の範囲による手法

人間の意識の範囲の広がりを不自然に遮断しないよう、目線の抜けをつくる。手法は以下の２つである。
１　敷地における遠景の取れる５ヶ所を頂点として傾斜とすることで遠景を確保する面積を増やす
２スキップフロアとすることで横方向への目線の抜けをつくる
３吹き抜けを利用し、下方向に視界が開け、人の活動、流れを眺めることができる
４壁の高さによる視線のコントロール

4-4 家具スケールから全体を構成する手法

人間の感覚から空間を規定するため、家具レベルのスケールから設計を考えた。家具スケールの設計から、全体を構築する建築へとスケールを横断させるための手法を示す。
１構造体を家具の一部として利用する(図 8・9)
２構造体による視線の遮断（図 10)
３家具の統一による内と外のつながり（図 11)
４スラブの隙間の利用（図 12)

図 8

図 9

図 10

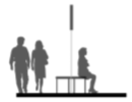
図 11

図 12

[主要参考文献]
１）エドワード・T・ホール　（日高敏隆、佐藤信行訳）「かくれた次元」　：みすず書房 1970 年
２）舟橋国男「建築計画読本」: 大阪大学出版会 2004 年
３）大澤真幸「電子メディア論」: メディア叢書　1995 年